

目的 アレン・パウリーによるエンゲル関数研究は、種々の家計収支作用要因の中から家計支出を規定している要因を判別し、その作用を計量する途を聞くものであつたが、家族構成の同質化をはかると同時に用いた成人等価数が、あまりに粗雑であつたということ、また、家計調査時期・地域・社会階層などの同質化が、狭な意味で成されていなかつたというところに少なからぬ問題を含んでいた。そこで本報告では、ライフサイクルモデルに基づいて、家族構成を指定した家計収支データをもとに、各ライフステージ別に、エンゲル関数に関する回帰分析を行ない、すでに第1報として掲げた生涯収支データについての分析結果との比較分析を行うことによつて、各ライフステージにおける収支作用要因の特徴を計量することとを目的とした。

方法 分析の対象となる家計収支データとしては、第1報において、総務庁統計局より入手した昭和59年度全国消費実態調査静岡県分勤労者世帯の家計データをもとに作成したライフステージ別収入階級5分位別収支集計データを用いた。分析方法としては、各ライフステージ別に、10大費目についてのエンゲル関数に基づく回帰分析を行い、全体の平均と考えられる生涯収支データによるエンゲル関数との比較分析を行うことによつて、各ライフステージを特徴づける収支作用要因を計量した。

結果 エンゲル関数に基づいて、各ライフステージにおける支出構成にみられる特徴を計量することとができた。